

ずっと信じてくれた

デヴィッドとケニヤッタに献ぐ

ある朝 僕は 森で

突然なにかにつまずいた、

ごつごつした樫と榆の中の

草の茂った空き地で それにつまずいた

すると あの煤けた場面が

強引に立ちはだかった 世界と僕のあいだに……

リチャード・ライト（「世界と僕のあいだに」）

世界と僕のあいだに

I

あたしには語らないで、

殉教についてなど

死んで 教区日に

ひとびとに追想される者たちについてなど。

あたしは死を信じない

あたしもいつかは死ぬのだけれど。

そのときすみれは

あたしの思いを歌い続ける

(鳴りやまない) カスタネットのように。

ソニア・サンチェス(「マルコム」)

息子サモリへ

このあいだの日曜日のことだよ。人気ニュース番組のキャスターが僕に向かって、「僕の肉体を失う」とは何を意味しているんでしょうか、と質問してきた。彼女はワシントンDCから放送をしていて、僕ははるか離れたマンハッタンの西のはずれにあるスタジオに座っていた。衛星が彼女と僕とのあいだの距離を埋めていたけれど、どんな機械を使っても、彼女の世界と僕が番組にスポークスマンとして呼ばれていた世界とのあいだにある溝を埋めることはできなかった。キャスターが僕の肉体について尋ねたときに、彼女の顔はスクリーンから消え、代わりに僕がその週のうちに書いておいた文章がスクロールされた。

キャスターは僕のその文章を視聴者に向けて読み上げた。読み終えると、具体的にそう口に出したわけじゃないけど、もとの「僕の肉体を失う」というテーマに戻った。だけど僕は今では、自分たちのリクエストの性質を自覚せずにインテリが僕の肉体の状態について尋ねてくることに慣れているんだ。具体的にキャスターが知りたがったのは、なぜ白人のアメリカ——厳密には自分は白人だと信じているアメリカ人のアメリカ——の進歩が略奪と暴力の上に成り立っていると僕が感じるのか、だっ

た。この質問を聞きながら、昔からの言うに言われぬ悲しみが自分のなかにこみ上げてくるのがわかった。この質問に対する答えは、自分は白人だと信じている者たちの来し方にある。答えは、アメリカの歴史なんだ。

そう言ったからって、少しも極論ではないんだ。アメリカ人は民主主義を神のように崇めている。その崇め方には、自分たちはときとしてその神に公然と反抗したことがあったと漠然と気づいていても、意に介さないところがあるがね。民主主義は咎め立てをしない神であるし、アメリカにおける異端——拷問、窃盗、奴隸制——は個人のあいだでも民族間でもあまりにありふれたことなので、自分は無縁だと広言できる個人も民族もまるでない。実際、アメリカ人が本当の意味で自分たちの神を裏切ったことは一度としてないんだ。エイブラハム・リンカーンが一八六三年に、ゲティスバーグの戦いは「人民の人民による人民のための政治を地上から絶やさない」ことを確実に保証しなければならぬと宣言したとき、リンカーンは高い望みを抱いているわけじゃなかった。南北戦争が始まった時点で、アメリカ合衆国の参政権の率は世界でも最高水準にあったんだよ。問題にすべきは、リンカーンが本心から「人民の政治」を意味していたかどうかではなく、この国が歴史を通じて「人民」という政治用語で実際には何を意味してきたかなんだ。一八六三年当時、それはお前のお母さんやおばあちゃんを意味してはいなかったし、お前や僕を意味してもいなかった。つまりアメリカの厄介な問題は、「人民の政治」を裏切ったことではなく、人民がどのようにして人民と呼ばれるようになったかなんだよ。

ここからもう一つの同じくらい重要な理想へと導かれる。アメリカ人が暗黙のうちに受け容れているが、意識的には主張することのない理想だよ。アメリカ人は、定義された、疑いようのない自然界の特徴としての「人種」^{レイシズム}というものが実在すると信じている。この状況は変わらないし、そこから「人種主義」も必然的に生じてくるのさ。人種主義っていうのは、消せない特徴があるグループ特有のものとし、その後でその人々を辱め、見下し、破壊したいという欲求のことだよ。こうして、人種主義は「母なる自然」^{マザーネイチャー}の「無垢の娘」とみなされ、みんなは「中間航路」や「涙の旅路」について、まるで地震や竜巻と同じように自然現象として嘆くしなくなるのさ。

けれども、人種は人種主義の子どもであって、その父親ではないんだ。それに「人民」を定義するプロセスが血統や骨相学の問題だったことは一度もなく、むしろヒエラルキーの問題だったんだ。肌の色や髪の違いは昔からある。けれども、肌の色や髪に優劣があるという信条や、肌の色や髪の違いという要因があつてこそ社会を正しく組織することができるし、その要因は消せない特徴を表しているんだという観念——こうした信条や観念は新しい考え方なんだよ。自分たちは「白人」だと信じるように育てられてしまった新しい、人民の心の中にある新しい、考え方なんだ。連中は、絶望的で悲劇的で詐欺的なことに、そういう育てられ方をされてきてしまったんだよ。

だから、こうした新しい「人民」は、僕ら「黒人」という存在もそうだが、近代の生み出したものなんだ。でも僕ら黒人と違って、彼らの得た新しい名称「人民」には、犯罪的な権力という構造から切り離してしまうと、実質的な意味がない。新しい人民は白人になる前は他の何者か——カトリック、

コルシカ人、ウェールズ人、メノー派、ユダヤ人——だったし、僕たちの国の希望がいくらかでも実現すれば、そのとき彼らはふたたび別の何者かにならなきゃならない。もしかしたら本当にアメリカ人になり、アメリカ人の神話にとつてのより高潔な礎^{いしづえ}を創り出すかもしれない。何なのかは僕にはわからないけどね。今の段階で言わざるをえないのは、まるで異なるいくつかの種族^{トライイブ}を洗って白くするプロセスや、白人であるという信条を高揚させることは、ワインのテイスティングやアイスクリームを食べながらといった「白人」同士の社交を通じて達成されたのではなく、むしろ次のような行為を通じて達成されたということだ。そもそまがお前や僕の「自分たちの肉体を守り支配する権利」を否定しようとして行われたことだが、生命・自由・労働・土地の略奪、背中をむち打つこと、手足を鎖でつなぐこと、反逆者の絞首、家族の解体、母親たちの陵辱^{レイプ}、子どもたちの売却——他にもあるがさまざまな行為を通じてだよ。

そんなことをやってのけたのは、この新しい「人民」が初めてというわけじゃない。また、ひょっとしたら歴史上のどこかの時点で、他の人間の肉体を暴力的に搾取することなしに国力を高めた大国があったかもしれない。あったとしても、僕はまだそれを見つけていないけどね。でも、「暴力のバナナ^{バナナ}」を理由にアメリカを免罪することは絶対にできないんだ。なぜならアメリカは、自国が陳腐だなんぞとは主張していないからさ。アメリカは、自国は例外的であり、かつて存在した中でもっとも偉大で高貴な国であり、民主主義を奉ずる白人の市民たちと、テロリスト・独裁者・野蛮人などの文明の敵とのあいだに立ちはだかる孤高のチャンピオンなんだと信じている。自分は超人だと主張し

ながら、同時に致命的な誤りを認めることはできない。僕は、「アメリカ例外論」を訴えるアメリカ人たちの主張を、まじめに受けとめることを提案するよ。つまり、この国を例外的な道德基準に当てはめてみればいいと思うんだ。これは難しいことになるがね。それというのも僕たちの周りの至るところに、アメリカの潔白を額面通り受け取ってあまり深く追究はしないようにと、そう促す構造が存在するからだ。さらに言えばね、素知らぬ顔をして、僕ら黒人が歴史を通じて産み出してきたものを利用し、黒人という名称をかぶせられた僕ら全員になされた大いなる悪^{イーブル}を無視するのは、とてもたやすいことだ。もつとも、お前や僕の立場では、実際にそんな贅沢、そんな楽な生き方を許されたことは一度もないわけだがね。お前にもわかつていることと思うが。

僕は一五歳になろうとするお前にこの手紙を書いている。なぜかと言えば、今年エリック・ガーナーがタバコを売ったために窒息死させられたのをお前が見たからだ。レニーシャ・マクブライドが助けを求めたために撃たれたことも、ジョン・クロフォードがデパートで商品をひやかしていたために撃たれたことも、もう知っているからだ。それから、制服を着た男たちがパトカーで通り過ぎた際にタミール・ライスを殺害したのも見たね。彼らが保護すると宣誓したはずの一二歳の子どもをだよ。それから、同じ制服を着た男たちが、誰かのおばあさんにあたるマーリン・ピノックを道端で何度も拳で殴ったのも、すでに見ている。それから、以前は知らなかったとしても今はもう、お前の国の警察はお前の肉体を破壊する権限を与えられていることも知っている。破壊が不運な過剰反応から生じたとしても、たいした問題とされない。破壊が誤解から生じたとしても、たいした問題とされない。

破壊が愚かな政策から生じたとしても、たいした問題とされない。しかるべき認可を得ずにタバコを売れば、お前の肉体は破壊されるかもしれない。お前の肉体を罠にはめようとした人々に対して憤れば、お前の肉体は破壊されるかもしれない。暗い吹き抜け階段に入っていけば、お前の肉体は破壊されるかもしれない。破壊した者が説明責任を求められることはめつたにない。たいていの場合、彼らは年金を受け取ることになる。そして破壊は、統治権力を示す最高の形というに過ぎず、その特権には職務質問での身体検査、拘留、殴打、そして屈辱を与えることが含まれる。こうしたことはすべて黒人にとっては月並みなことだ。しかも、こうしたことはどれもみな黒人にとっては昔からあることだ。誰も責任を負わされはしないんだよ。

そうした破壊者たちのなかにも他と異なる悪は見られない。それどころか今という時点にも他の時点と異なる悪は見られないんだよ。破壊する者たちは、この国の気まぐれを執行していて、伝統や遺産を正しく解釈している男たちだというだけなんだよ。そのことに向き合うのはつらい。でも、僕たちの言葉遣いはすべて——人種関係、人種間の亀裂、人種間の平等、人種を適用したプロファイリング、白人の特権、そして白人優位でさえも——次のことを曖昧にする役目を果たしているんだ。人種主義が理屈抜きの体験であり、脳を打ち砕き、氣道を塞ぎ、筋肉を引き裂き、臓器を引き抜き、骨を砕き、歯を折ることであるのを曖昧にする役目をね。お前は、絶対にそこから目をそらしてはいけないよ。お前はまた、いつでも心に留めておかなきゃならない。社会学、歴史、経済学、図式、図表、統計の「回歸」と何を動員しても、結局はひどい暴力となって肉体に降りかかってくるんだって

ことをね。

日曜日のニュース番組のなかで、キャスター相手に僕は与えられた時間内でできるだけうまくこのことを説明しようとした。けれどもそのコーナーの最後に、キャスターは広く知られていた写真をさつと見せた。一歳の黒人少年が泣きながら白人警官を抱きしめている写真だ。それから彼女は僕に「希望」について尋ねた。そのとき、僕は自分が失敗したことを悟った。そして、自分は失敗することを予期していたんだ、と思い出した。それから僕はもう一度、自分の中にこみ上げる、言うに言われぬ悲しみについて考えた。正確なところ、なぜ僕は悲しいんだろうか、とね。僕はスタジオを出て、少しのあいだ歩いた。一二月の静かな日だった。自分たちは白人だと信じている家族連れが街に繰り出している。白人として育てられた赤ん坊がシートベルトでベビーカーに固定されている。そして、僕はその人たちのために悲しみ、同じようにキャスターのためにも悲しみ、もつとらしい希望に浮かれ、その実現を待ち望んでいる周りのすべての人たちのためにも悲しんだ。そのとき、なぜ自分が悲しいかがわかった。あのジャーナリストが僕の肉体について尋ねたとき、まるで彼女はいちばんすてきな「ドリーム」から自分の目を覚まさせてくれと僕に頼んでいたようなものだった。僕はこれまでの人生ですつとその「ドリーム」を見てきた。それは、きれいな芝生のある完璧な家だ。それは、戦没将兵記念日にバーベキューパーティーをすること、町内の集い、それに車寄せまでの道だ。その「ドリーム」はツリーハウスやカブスカウトだ。その「ドリーム」はペーパミントのにおいがするけれど、味はイチゴのショートケーキだ。そしてとても長いあいだ、僕はそうした「ドリーム」の中

に逃げ込んで、自分の国を毛布みたいに被^{かぶ}りたかった。でも、そんな選択の自由は一度もなかった。なぜならその「ドリーム」は僕たちの背中に、僕たちの肉体でできた寝具のうえに載っていたからだ。そして、それがわかったから、そのわかつてしまった世界と戦わなくては僕ら黒人は「ドリーム」を持てないだともわかったから、僕はキャスターのために悲しみ、あのすべての家族連れのために悲しみ、自分の国のために悲しんだが、何よりもあの瞬間、僕はお前のために悲しんだのだった。

あれは、マイケル・ブラウンを殺害した男たちが釈放されることをお前が知った週だったね。自分たちの権力は不可侵のものだとおどろに宣言するかのよう^ににマイケルの肉体を通りに放置した男たちは、罰されることはけつしてないだろう。誰かがいづれ罰されるとは、僕は期待していなかった。けれどお前は若く、まだ信じていた。お前はあの晩、午後一時まで起きていて、起訴が発表されるのを待っていた。そして逆に起訴しないとの発表が行われたとき、お前は「もういかなきゃ」と言って自分の部屋に引っ込み、やがてお前の泣き声が聞こえた。僕は五分後にお前の部屋に行ったが、抱きしめてもやらなかったし、慰めてもやらなかった。お前を慰めるのは間違っていると思ったからだ。大丈夫だとお前に言^{つて}てやらなかったのは、大丈夫だなんぞと本心から思ったことが一度もなかったからだ。お前に伝えたのは、お前のおじいちゃん、おばあちゃんが僕に伝えようとしたことだった。これがお前の国なんだよ。これがお前の世界なんだよ。これがお前の肉体なんだよ。だからお前は、その状況の中で生きていく方法を見つけないといけない、ってね。僕は今はこれもお前に伝えよう。黒人の肉体の中でどうやって生きるべきか、「ドリーム」にふけっている国の中でどうやって生きる

べきか、という問いかけは僕の一生かかったの問いかけであるし、どうやらこの問いかけを追究してゆけば最終的におのずから答えが出るのが僕にはわかったんだ、ってね。

こう言うとお前には奇妙に思えるにちがいない。僕たちは「ゴール志向」の時代に生きている。メディアで使われている語彙は、何についてもだが、分析のない無茶な一般化やとんでもない目論見やおおぼろなんかでいっぱいだ。でもどこかの時点で、僕は、どんな形で表されているにせよ魔法というものを拒絶した。この拒絶はお前のおじいちゃん、おばあちゃんからの贈り物で、ふたりは「死後の世界」という考えで僕を慰めようとは絶対にしなかったし、あらかじめ運命づけられたアメリカの栄光つてもものにも疑念を抱いていたんだよ。歴史のカオスも、来世などなく自分が完全に終末を迎えるという事実も受け容れたので、解放されてる僕は、自分がどのように生きたいかを本気で考えるようになった——とりわけ、この黒人の肉体の中でどのように自由に生きるか、をね。これは心の底からの問いかけだ。なぜならアメリカは、自国は神によつて創造されたと認識しているけれど、黒人の肉体はアメリカが人間の手で作られたことを如実に物語っている証拠なんだからね。僕は読書や書き物を通して、若い頃聴いた音楽を通じて、お前のおじいちゃんやお前のお母さん、ジャナイおばさんやベンおじさんとの議論を通じて、この問いかけをしてきたんだ。僕はナシヨナリストのつくりだす神話のなかにも、教室においても、ストリートにおいても、そしてほかの大陸においても、答えを探し求めてきた。この問いかけには答えが得られるものではないけれど、だからといって無益というわけではないんだ。このようにいつも問い続けること、この国の残忍さと向き合うことから得



られる最大の恩恵は、僕を亡霊から解放し、「魂の肉体からの遊離」という恐ろしい恐怖に立ち向かう気構えをさせてくれたことだったんだからね。

そうだね、僕は恐れているよ。お前が僕から離れるときに、いつもいちばん鋭くその恐怖を感じるでも、僕はお前が生まれるずっと前から恐かったし、これに関しては僕に始まった話ではない。お前の年齢だった頃、僕が知っているのは黒人だけで、彼らの恐れようは一人残らず強烈で、頑なで、危険なほどだったな。それが恐怖だといつも認識していたわけじゃないけど、僕はこの恐怖を成人するまでずっと目にしていたんだよ。

恐怖はいつも僕のすぐ目の前にあった。恐怖は近所にいる豪勢なりの少年たちの中に、彼らの大ぶりの指輪やメダル、大きくて膨れたコートや引きずりそうなほど丈が長く襟元に毛皮をあしらった革のコートの中にあり、彼らはその鎧をまとうて世界に対峙していた。彼らは、リバイハイツ通りとグウィンオーク通りの角や、コールドスプリング通りとパークハイツ通りの角、モンドウミン・モールの外で、ラッセル社製のスウェットに両手をつ突っ込んでたむろしていた。今あの少年たちのことを思い返すと、僕には恐怖しか見えないし、彼らは過去のつらい時代の亡霊から自分たちの身を守っていたことがよくわかるよ。ぶら下げた黒人の肉体に火をつけ、切り刻めるように、ミシシッピ州の暴徒が彼らの祖父たちを取り囲んだ時代のことだ。その恐怖は、彼らの熟練しているバップ、だぶだぶのデニム、ぶかぶかのTシャツ、野球帽の計算された傾げ^{かし}方^{かた}のなかに染みついていた——どれもこれも、俺たちや望むものなんでもちゃんと持つてゐるんだぜという思いを高めるために、この少年

たちがとり入れた行動や装い、のカタログだったんだよ。

僕は彼らの争いのしきたりのなかにもそれを見た。僕がせいぜい五歳のときだったが、ウッドブルック通りにある自宅の正面の階段に座って、上半身裸の少年ふたりが顔を突き合わせんばかりにしてお互いの周りを回りながら肩をこづき合うのを見ていたものだ。そのときから、ストリートでの喧嘩には儀式とか規則や規定があることを僕は知ったんだ。そうした儀式とか規則や規定を必要とするところこそが、黒人ティーンエイジャーの肉体がいかに傷つきやすいかを余すところなく証明していたんだだけだね。

僕は初めて知った音楽の中から恐怖を聴きとった。ジュークボックスから吐き出されたその音楽は、おぼろげや空威張りでいっぱいだった。ギャリソン通りとリバティハイツ通りの角や、パークハイツ通りでたむろしている少年たちは、この音楽をえらく気に入っていた。気に入っていた理由は、実際の証拠も確率も正反対のことを告げているのに、彼らこそが自分の生活、自分のストリート、自分の肉体を支配していると歌っていたからだ。僕は少女たちの中にも、彼女らの騒々しい笑い声の中にも、彼女らがつけている金メッキのバンブーピラスの中にも恐怖を見つけた。ピラスの中に名前があるデザインだから、彼女らの名前が何度でも読みとれたものだ。それからきつい視線や粗暴な言葉遣いの中にも恐怖を見つけた。その視線や言葉遣いたるや、おふざけが過ぎるぜと咎めて、目力めぢからで人を切り裂き、言葉で人を破壊する手段だったんだよ。「俺の名前をきやすく口にするんじゃない」と彼らは口にしたものだ。僕は放課後によく彼らの姿を、彼らがボクシングの構えをし、ワセリンを塗り、ピ

アスを外し、リーボックを履き、互いに向かつて飛びかかる様子を、眺めたものだったな。

僕はフィラデルフィアにある僕のおばあちゃんの家に遊びに行くときにも恐怖を感じた。お前は僕のおばあちゃんのことを知らない。僕もほとんど知らなかったんだけど、彼女の厳しいマナーやがらが声は今でも覚えている。僕の父さんの父さんも、オスカーおじさん、デヴィッドおじさんも亡くなっていったこと、そしてどのケースも不自然な死に方だったことは知っていたけどね。そして、僕は僕の父さんのなかにも恐怖を見つけた。お前を愛し、お前に助言を与え、お前のために使えるように僕にそっとお金を渡してくれたお前のおじいちゃんの中にね。父さんは本当にひどく恐れていた。僕は父さんの黒い革ベルトで打たれたときの激痛の中にそれを感じた。父さんは怒りというより不安に駆られてベルトを使った。父さんは誰かが僕を盗んでいってしまうと思ってもいるように僕を打った。僕たちの周りでまさにそうしたことが起きていたからだ。誰もがなんらかの形で、たとえばストリートのせいで、刑務所のせいで、ドラッグのせいで、銃のせいで、子どもを失っていた。そうして失われた少女たちはハチミツのように甘くて、ハエだって傷つけようとしなかったと言われていた。そして失われた少年たちはハイスクール卒業資格を取得できる試験（GED）に合格したばかりで、まさに人生が変わるところだったと言われていた。そして彼らがいなくなってしまうと、彼らが遺したものは大いなる恐怖だけだったんだよ。

この話を誰かから聞いたことはあるかな。お前のおばあちゃんが一六歳だったとき、若者が家の戸をたたいた。その若者はお前のおばあちゃんの妹のジョーのボーイフレンドだった。家にはほかに誰

もいなかった。お前のおばあちゃんはこの若者をうちに入れ、ジョーが帰ってくるまで座って待たせてやった。ところがお前のひいおばあちゃんが先に帰ってきたんだ。彼女はその若者に出ていってくれと言った。それからお前のおばあちゃんをひどくたたいた。どれだけのやすく自分の肉体を失う可能性があるかを覚えてるように、仕上げにもういちどだよつてぐあいね。お前のおばあちゃんは絶対に忘れなかった。通りを渡るとき、お前のおばあちゃんが僕の小さな手をぎゅつと握りしめていたことを覚えてる。もし僕が手を離して飛び出して、突っこんでくる車に殺されたら、僕をたたいでも生き返らせるよ、そうお前のおばあちゃんはいつも言っていた。僕が六歳のとき、お前のおじいちゃんとおばあちゃんが近所の公園に連れて行ってくれたことがある。僕はふたりの監視の目を逃れて遊び場を見つけた。お前のおじいちゃん、おばあちゃんは、僕を探して不安な数分間を過ごした。ふたりが僕を見つけたとき、父さんは僕が知っているどの親でもしただろうことをした——ベルトに手を伸ばしたんだ。自分のした間違いと罰のあいだにある隔たりの大きさに恐れをなして、放心してお前のおじいちゃんを見ていたことを覚えてるよ。後になつて、僕はそれを父さんの声で何度も聞くことになる——「おれがあいつをたたいとてやらなきゃ、警察がたたくことになるんだぞ」。たぶんそのおかげで僕は助かったんだろう。そうではなかったかもしれないけど。僕にわかるのは、火から煙が立ち上るように恐怖から暴力が生じるってことだけだ。たとえ恐怖や愛情からくるものであっても、その暴力が火災警報を鳴らしたのか、あるいは出口で僕たちを窒息させたのかは、僕にはなんとも言えない。僕にわかっているのは、生意気な口答えをするという理由でティーンエイジャー

の息子を殴る父親たちが後になって彼らをストリートに放つと、ストリートで息子は同じ処罰をやつてのけるし、またその処罰を受けることもあつたつてことだ。娘をベルトで打つ母親たちのことを知つていたが、ベルトでは、娘の倍は歳をくつているドラッグの売人から娘を守ることはできなかった。僕たち子どもは飛び切りブラックなユーモアを駆使してそれに対抗した。僕たちは路地にたむろし、そこで梓だけにした木箱にバスケットのボールを通すのをシュートと決めて遊びながら、軽口をたたいたもんだよ。ある男の子の母親は、五年生のクラスメイト全員の前でその子をたたきのめしたらしいよ、とかね。僕らは五番のバスの座席に腰かけてダウンタウンに向かいながら、ある女の子の母親はなんにでも——電線ケーブル、延長コード、ポット、平鍋——手を伸ばすことで有名なんだ、と言つて彼女を笑いの種にした。僕たちは笑つていたけれど、自分をいちばん愛してくれる人たちを恐れていたことが今の僕にはわかる。親たちは、疫病が流行つた時代に自分に鞭打つた苦行者（フラジエラント）たちが鞭に手を伸ばしたように、鞭に手を伸ばしたんだよ。

僕が若い頃のボルチモアで黒人であるということは、この世界を構成するもろもろの要素——銃、拳、ナイフ、クラック、^{レイプ}陵辱、それに病氣——の前に裸を晒しているようなものだった。裸を晒していること自体は間違ひでもなければ病的でもない。裸を晒していることは、生き方の順当で意図どおりの結果であり、何世紀ものあいだ恐怖のもとで生きるよう強いられた人々にとつての予想通りの帰結だった。法律は僕たちを守つてくれなかった。そして今、お前の時代には、法律はお前を足止めして職務質問の身体検査をするための口実になっている。言つてみれば、お前の肉体にもっと暴力をふ

るおうとすることの口実だな。だけど、学校、政府系住宅ローン、それに先祖からの遺産といったセーフティネットを介して一部の人々を守る一方で、お前のことは刑事司法という棍棒でしか守れない社会は、立派な意図を実行に移すのに失敗したか、そうでなければはるかに後ろ暗い何ものかに成功したかのどちらかだ。どちらであろうと構わないが、結果として僕たちはこの世界の犯罪的な権力の前では無力だ。そうした権力の手先が白人か黒人かはどうでもいいんだ——問題なのは僕たちの置かれた状況であり、問題なのはお前の肉体を破壊されやすいものとしている体制なんだよ。

こうした権力の暴露、一連の大きな変化は、僕がこれまで生きてきた中でだんだんと展開してきた。この変化は今も展開されているし、きっとそれは僕が死ぬまで続くだろう。僕は一一歳のとき、セブンイレブンの店舗の正面にある駐車場に立ち、年上の少年たちの仲間がストリート脇に立っているのを眺めていた。彼らは大声で叫び、ジェスチャーをしていた……誰にだ？……もう一人、僕のように年下の少年がそこに立っていて、微笑んでいるかのような表情で勇敢にも両手を上げている。その少年は、その日僕が与えられることになる教訓をすでに身につけていた。自分の肉体はつねに危険に晒されているんだ、という教訓をね。どうやってその子がその教訓を知るに至ったかは、わかるわけではないけどね。公営住宅でか、飲んだくれた継父か、警官のせいで脳震盪を起こした兄か、市刑務所にぶちこまれた親類か。彼が数で負けていたことはどうでもよかった。なぜなら全世界がとうの昔に彼を数で圧倒していたし、そもそも数が何の意味を持つというんだい？ これは彼の肉体の所有をめぐる戦いであるし、彼にとって生涯にわたって続く戦いになるんだからね。